

ウィトゲンシュタインにおいて見かけが問題となるとき

榎野 沙央理 (Saori MAKINO)

大正大学

ウィトゲンシュタイン哲学において、読み手はしばしば何かを「見てとる」ことが要請される。このことは、前期に区分される『論理哲学論考』においては、「語り」と「示し」(cf. TLP 4.1212) の峻別の中で理解されるだろう。後期から晩期に区分される遺稿においては、図・顔・絵画の理解をめぐる考察、ひいてはアスペクトをめぐる考察の中で捉えられるだろう。このように、読み手が何かを「見てとる」ことを、ウィトゲンシュタインのテキストが、前期においても、後期においても、要請していたとしたら、それによってもたらされることにはどのような意義があるのだろうか。ウィトゲンシュタインが生涯、「示しの哲学」に希望を持っていたのだとすれば、その重要性はどのようなものだったのだろうか。

この大きなテーマの入り口となる問題設定として、本発表では、後期に区分される遺稿『哲学探究』(以下、『探究』と呼ぶ)後半における、図・顔・絵画の理解をめぐる考察に着目する。ウィトゲンシュタインは、一定の仕方(色や形)で与えられた配列が、特定の顔つき(怒った顔・怯えた顔・喜んでいる顔)として扱われるという、一見自明な事柄に注意を向けようとする(cf. PU 523-4)。一定の配列を与えられた私たちが、そこに特定の表情を見ることが、いわば日常的に自明なこととして行っていることにあえて注意を向ける意義があるとすれば、それは何であるのだろうか。

提題者は、一定の仕方与えられた配列と、特定の顔つきという、日常では不可分なこととして扱われがちな二つの事柄を、『探究』が、分離可能なこととして扱う点に着目したい。私たちは、普段、「吊りあがった眉と真一文字に閉じた口の組み合わせ」と、「疑い深い顔」とを区別して扱わない。私たちは、両者を不可分なこととして扱い、端的に「疑い深い顔」だと言ったり「反応」したりする。「疑い深い顔」と、「吊りあがった眉と真一文字に閉じた口の組み合わせ」が同一であることは、前提とされているのである。

このことから、一定の仕方与えられた配列と、特定の顔つきという、日常では不可分なこととして扱われがちな二つの事柄を、『探究』が、分離可能なこととして扱うのは、混乱をもたらすように思われるかもしれない。だがこの疑念に抗して、提題者は、次のような「示しの哲学」の道筋を与えたい。

確かに、日常では、一定の仕方与えられた配列と、特定の顔つきとは不可分な仕方与えられる。(私たちは、配列を「解釈」するのではない。)そのため私たちは、前者(一定の配列)が与えられれば、後者(特定の顔つき)も自動的に与えられると思込みがちである。すると、私たち意味を取り扱う主体が、自身でどんな被り方をしているかを明晰化することなく、一定の配列が与えられれば決まった特定の顔つきも与えられるのだと措定してしまう。これにより、私たち意味を取り扱う主体は、一定の配列に対して、決められた特定の顔つきを読み取ることができなければならないことになる。だが、私たちが日常、端的に「疑い深い顔」について語ったり「反応」したりすることを、できなければならないと言う

のは受け入れられるだろうか。ここには、不必要な哲学的描像（押し付けられた同一性概念とでも言うべきもの）が差し挟まれているように思われる。

このような哲学的描像に抗して、私たち意味を取り扱う主体が、自身でどんな同一性の被り方をしているかを明晰化するために、ウィトゲンシュタインの示唆を役立てたい。ウィトゲンシュタインに従い、一定の仕方与えられた配列と、特定の顔つきとを分離して考えるのである。つまり、両者が同一であることを「あえて」戦略的に前提としない方法をとることで、押し付けられた同一性概念を退け、代わりに、両者を同一とする自主的なプロセスを与えるのである。詳しくは発表内で検討するとして、一方で私たちは、一定の配列（例えば「吊りあがった眉と真一文字に閉じた口の組み合わせ」）を世界から受動的に受け取る。もう一方で私たちは、ある顔つき（例えば「疑い深い顔」）を能動的に見てとる。このように、受動的に受け取ったものを能動的に取り扱うプロセスを自己明晰化することで、一定の配列を与えられた私たちが、そこに特定の表情を見ることにあえて注意を向ける意義を示したい。

参考文献

Wittgenstein, L. (2009), *Philosophical Investigations*, 4th edition, P.M.S. Hacker and Joachim Schulte (eds. and trans.), Oxford: Wiley-Blackwell.

--. (1963), *Tractatus logico-philosophicus* *Logisch-philosophische Abhandlung*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.